

映画「平成狸合戦ぽんぽこ」を活用した市民コミュニケーション手法の提案

H03038 後藤めぐみ
指導教員 岩倉成志



1.背景と目的

今、土木の分野では「社会」とのコミュニケーションをとることが重要視されている。土木が社会に対し、大きな役割を担っている以上、公衆に対して「土木」に関する情報を十分に開示していく必要がある。しかしながら、現状では土木が「社会」に対し十分な情報開示をしていない問題があり、公衆の理解不足から必要な社会基盤の整備が停滞してしまう事態も少なくはないようだ。

1994年、スタジオジブリ制作のアニメーション映画「平成狸合戦ぽんぽこ」が上映された。この作品は、多摩ニュータウン開発を題材に、開発を進める側の人間と開発を阻止しようとする狸の攻防が描かれており、その内容から土木事業に関わりの強い作品として知られている。

「平成狸合戦ぽんぽこ」の上映は、多くの人々にニュータウン開発について関心を持ってもらうチャンスであり、施行者側が「平成狸合戦ぽんぽこ」を踏まえたアプローチを公衆に対して行うことで、新たなコミュニケーションの手法を提示できるのではないだろうか。

本研究では、多摩ニュータウンにおいて「平成狸合戦ぽんぽこ」がどのような影響を与えたのか、また「平成狸合戦ぽんぽこ」で映された内容と実際の施工方法を調査し、その結果より「平成狸合戦ぽんぽこ」を用いたコミュニケーション手法を検討した。

2.多摩ニュータウン開発概要と住民理解

多摩ニュータウンは、戦後の高度経済成長期における東京都心部の人口増加に伴った住宅難の解消と、都市郊外のスプロール化防止のために計画された国内最大級のニュータウンである。

計画開始時より40年以上経つ今となっては、多摩ニュータウンに住む人の中でも、開発についての理解は薄く、ニュータウンに住む方(20代)へのヒアリングでも「学校の授業で取り上げられることはあったが、遠い昔のことであり、実感としてわかない。」との話であった。

3.「平成狸合戦ぽんぽこ」の内容と影響

監督である高畑勲は、リアリティーに基づいた作品を描くことで知られており、この作品も事実に基づいて制作された。住宅供給が優先され、環境に対する配慮が薄かったとされる昭和40年代開発初期の東部地区開発が主に扱われ、狸側の目線から開発と環境保護の問題に触

れている。

多摩ニュータウンに対する住民の理解が薄くなっている中、この作品によってニュータウン開発を知る人も多く、環境問題について考えさせられたとの声も高い。

4.NPO・FUSION 長池の活動

「NPO・FUSION 長池」は「平成狸合戦ぽんぽこ」の影響を受けて活動を始めたNPO団体である。

ヒアリングに協力して下さった理事長の富永一夫氏は「平成狸合戦ぽんぽこ」についての感想を「知らぬうちに環境破壊の片棒を担いでもらっていたことに衝撃を受けた。これからは自然と人間が共生できる街づくりをしていきたい。」と語ってくれた。

『「平成狸合戦ぽんぽこ」の有効利用』について尋ねると「アニメーションなどは、作り方によって面白いもの、理解しやすいものになりうる。それをきっかけに人と語り合うような人間関係を築き、上手く用いることで社会奉仕にも有効であると思う。」との意見をいただいた。

5.多摩ニュータウン開発において行われた環境問題対策

昭和50年代開発後期にあたる西部地区開発においては環境問題への対策が取り扱われ始めている。「平成狸合戦ぽんぽこ」では表されていないが、これらの対策を土木技術者は施行者側からの正しい情報として述べる必要があると考え、表1に示す環境問題対策の経緯を施行者(都、公社、都市機構)発行の文献などから調査した。

<生息地の減少>

映画の中では開発に伴う森の減少によって狸たちが生息地を失っていく様子が描かれている。事実、40年代においては緑地保全に対するの基準というものが設けられておらず、公園緑地は10%以内におさめられた。

しかし、50年代に入ると、環境問題への意識の高まりが世論にもあらわれ、多摩ニュータウンにおける緑の計画も大幅に見直された。結果、公園緑地は公共用地で17%以上、準公共用地を含め30%以上を確保するよう改善された。また、植栽に対する予算の増額も図られ、植栽本数が大幅に増加した。重要な緑地資源である、樹木、表土についても、再利用の措置がとられ、活用が図られた。

40年代においては、コストがかかるために却下されてしまった自然地形利用案についても、50年代の開発では採用され、地形を活かした開発が行われた。

このような緑地保全を行った事で、平成2年の時点での緑被率は37.8%と良好な結果を得ることができた。また、東京都は「東京構想2000」のなかで政策指標として、多摩部における自然の減少を最小限にして現状を維持することを挙げている。

<大型土工機械による造成>

映画の中でパワーショベルやブルドーザーが山肌を切り崩すシーンによって自然環境破壊が印象的に描かれている。

40年代の宅地供給優先の開発の中では丘陵地における運搬土量は非常に多く、施工能率の向上、施工コストの低減のためには欧米の新しい大型土工機械を導入し、機械化を図る必要があった。

このような開発に対して住民たちは異論を唱え、都知事宛に提出した要望書の中で、ブルドーザーでの造成に中止を求める内容を書いている。これに対して施行者側は開発後期の西部地区開発にあたっては極力自然地形を活かした造成を行うことを示した。

<狸への影響>

映画では、開発によって追いやられる狸たちの姿が描かれており、開発が生態系へ与える影響についても問いかけている。

実際の開発においては、48～49年に「多摩ニュータウン西部地区環境保全生態調査」がされたが、生態系保護のための技術的対策が行われたかに関しては具体的な記述を見つけることはできなかった。

また、映画のなかの描写でもあるように、山林を追われた狸が住宅地で交通事故にあってしまう例は開発以降増加しており、問題視されていた。これに対し、町田市は平成5年に狸専用トンネルを設置し「動物にやさしい街づくり」への取り組みをみせている。多摩市では、平成15～16年に「動植物の現況調査」が行われ、自然環境保全のための基礎的資料の作成が始まっている。

6. 「平成狸合戦ぽんぽこ」を用いた市民コミュニケーション手法の提案

現在、様々なコミュニケーションの手法があるが、これらはそれぞれ「状況把握」、「意見調査」、「参加促進」、「対話」、「情報提供・意見把握」の5つの目的に応じた特徴を持っている。

規模が大きく、多くの人の生活に影響を及ぼすニュータウン開発においては、これら5つを満たすようなコミュニケーションが行われることが望ましいと考える。

2005年、多摩ニュータウン開発事業は終了したが、今後はよりよいまちづくりに向け、定期的に説明会を開くなど、コミュニケーションを行う場を設けることが必要

表1 映画の内容と開発手法の推移

映画中での表現	40年代(開発当初)東部地区	50年代(開発後期)西部地区	近年(60年代以降)
・生態地(緑地)の減少	・緑地保全に関する基準がない 公園緑地 10%以下	・計画の見直し 公園緑地 17%以上 その他(準公共用地)を含め 30%以上 ・植栽工事費の予算増額 ・表土、緑の保全	・平成2年 緑比率 37.8% ・「東京構想2000」 自然の減少を最小限 総体的な現状維持
・大型土工機械による造成	・自然地形利用案 コスト増 却下	・大造成の為、施工能率Up. コストDown ・自然地形を活かした開発	
・狸(生態系)への影響	・48～49年 「多摩ニュータウン西部地区 環境保全生態調査」 具体的な対策とられず 住宅供給優先 大造成	・環境を意識 自然を活かした開発	・平成5年 町田市 狸専用トンネルの設置 ・平成15年～16年 多摩市 動植物の現況調査

表2 説明会における「平成狸合戦ぽんぽこ」のコミュニケーション効果

コミュニケーション手法	効果	状況把握	意見調整	参加促進	対話	情報提供 意見把握
説明会						
「平成狸合戦ぽんぽこ」						

である。参加者と施行者が双方向性を持って話し合える説明会は、表2に示すように「対話」を目的とした手法にあたり「意見調査」、「情報提供・意見把握」についても有効であるとされている。一方「平成狸合戦ぽんぽこ」は、影響力の大きいメディアであること、対象が子供から大人まで幅広いことなどから「参加促進」を目的とした手法として効果的であると考えられる。また、ニュータウン開発を題材にした内容から「状況把握」にも効果があると思われる、さらに「平成狸合戦ぽんぽこ」の表現と実際に行われた環境対策についてを施行者側が情報提示することで、より活発な「情報提供・意見把握」が可能となるだろう。説明会のみではできなかったコミュニケーションを「平成狸合戦ぽんぽこ」を用いることで補うことができる。

アニメーション映画として人気の高い「平成狸合戦ぽんぽこ」が人々に与える影響は大きく、ニュータウン開発に対する問題提起となりうる。土木技術者は説明会に「平成狸合戦ぽんぽこ」を積極的に取り入れることで、コミュニケーションの活性化を図ることができるだろう。

7.まとめ

本研究を行うにあたり「土木とコミュニケーションの関係」、「アニメーションの影響」などについても調査した。NPO・FUSION 長池理事長の富永一夫氏へのヒアリングでは、コミュニケーションの重要性についてのリアルな意見を伺うことができた。

「平成狸合戦ぽんぽこ」を活用した市民コミュニケーション手法を提案し、市民の土木事業への正しい理解につながる可能性を述べた。